

伝統の仙台門松を復元する

正月を代表する風景として門松があります。かつての仙台城下で飾られた門松は、現在よく知られている門松の形「斜めに切った三本の竹を藁（わら）で巻く」とは全く異なるものでした。

それは、2本の柱に大きな松と笹竹を取りつけて、門のように造り上げ、しめ縄を巻きつけて、中央に「ケンダイ」と呼ばれるしめ飾りを取りつけ、鬼打木という割り木を根元に添えるものでした。

地域や家によって形や材料に少しずつ違いはありますが、このような門松は、ほぼ旧仙台藩領全域で飾られていたようです。しかし、明治時代以降、少しずつその数を減らし、とくに第二次世界大戦中や高度経済成長期に激減し、個人宅でこのような門松を飾ることはほとんどなくなりました。

①心柱（しんばしら）

松や笹竹などをくくりつけるための支柱です。おもに栗の木や桐（くぬぎ）の木が用いられます。

②松（三階松）

心柱に取りつける松は、三段に枝分かれした三階（さんがい）松が一般的ですが、仙台城に飾られた門松では、五階松や七階松が用いられました。

③笹竹

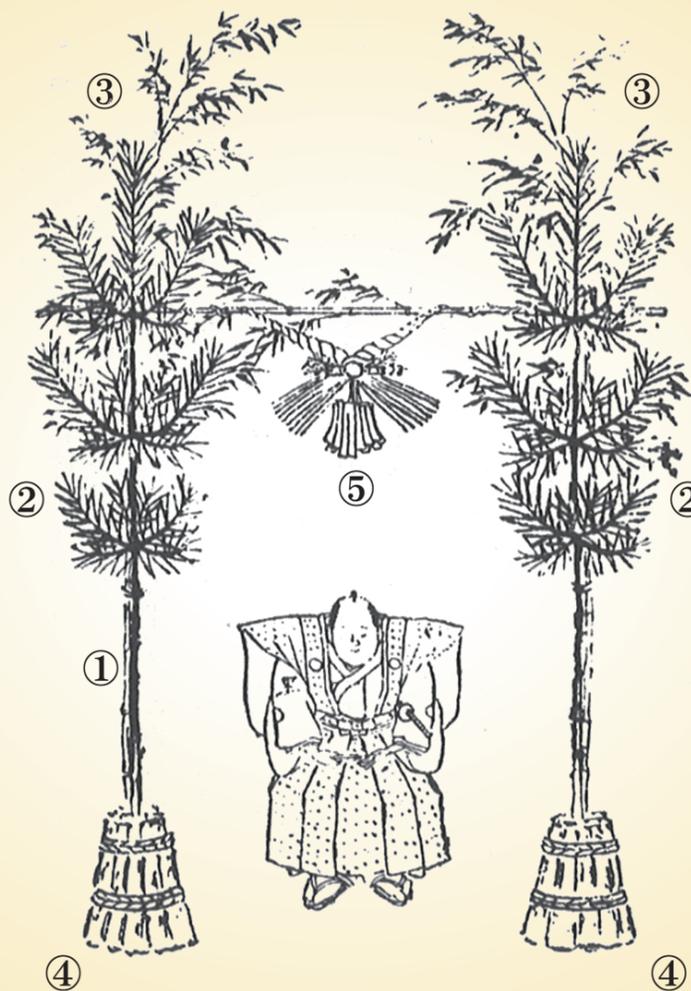
松の上方には、上に伸びるように枝葉が付いた笹竹が取り付けられます。また、心柱を結ぶように竹が横に渡されることが多いようです。

④鬼打木（おにうちぎ）

心柱の根元には「鬼打木」と呼ばれる割り木や板がくくりつけられます。3枚あるいは12枚と数が決まっている場合もあれば、多くの割り木で心柱の根元をおおい隠すようにする場合もあります。おもに、檜（なら）や栗の木が使われます。

⑤ケンダイ

門松の中央に付けられるしめ飾りは「ケンダイ」と呼ばれます。地域により少しずつ形は違いますが、藁で作ったしめ飾りを交差させ、紙で作った梵天状の飾りを付け、炭や昆布、かんきつ類、干し柿などが添えられます。



図は、江戸時代に仙台城下で版元を営んでいた山田屋が、版画の下絵として描いた仙台門松です。

仙台城の門松

仙台城で飾られた門松は、五階松や七階松を使い、約4mの高さになる豪壮なものでした。寛文10年（1670）の古文書によると、そのころ仙台城と藩の施設で、42組の門松が設置されていました。城下にある藩の関連施設の分も相当あったようです。

こうした仙台城で飾られる門松の材料は、宮城郡根白石村（仙台市泉区根白石）から献納されるのが恒例となっていました。門松の材料を納める家は「御門松上げ人（おんかどまつあげにん）」と呼ばれる8軒に限られていました。

仙台門松の復元

旧仙台藩領で飾られていたこのような門松は、近代以降、急速にその数を減らしました。しかし、仙台市博物館が調査を重ね、さらに仙台市泉区根城石で伝統的な門松を今も飾っている旧家の協力を得て復元することができ、仙台市内の歴史系ミュージアムで復元・展示活動が行われています。

このたび、一般社団法人心のふるさと創生会議では、仙台の歴史と文化を継承することを目的に、この仙台門松を多くの方に知っていただきたく、賛同いただいた下記の4ヶ所で展示を行うことになりました。伊達政宗以来の仙台藩内で飾られた仙台門松をご覧いただき、仙台の歴史と文化の一端に触れていただければ幸いです。

日本料理「はや瀬」（仙台市青葉区中央1丁目 ホテルモロリアン仙台2F）	12/26～1/9
第三志ら梅ビル（仙台市青葉区本町1丁目）	12/27～1/13
菓匠三全 広瀬通 大町本店（仙台市青葉区大町2丁目）	12/26～1/13
東北福祉大学 仙台駅東口キャンパス（仙台市宮城野区榴岡2丁目）	12/27～1/13

製作 一般社団法人 心のふるさと創生会議
協力 仙台市博物館 東北福祉大学